

---

## 第 22 章 教師として議員として：1969 年～1970 年代前半 (32 歳～37 歳頃)

### NHK のアウレフ取材

日本の国営テレビ NHK がアウレフへ取材に来ることになった。小堀教授の推薦を受けて、私も取材に協力した。フォガラとアウレフ地域を対象としたルポルタージュである。ロケは一週間以上に渡って展開された。

東京大学の地理学教授、小堀先生の、アウレフ地域とフォガラに関する著作が出版された後（訳注：中央公論社『サハラ沙漠』1962 年）、NHK が当地の地下水利用システムに関心を持ち、これを映像に収める企画が持ち上がった。私も 1961 年 10 月小堀教授がアウレフにやって来た時のことはよく覚えていた。フォガラを調査するため、私たちは二週間以上行動を共にした。その後 1969 年になってから、NHK はアルジェリア国営放送に打診し、共同でアウレフのルポルタージュを作成し、出来上がったフィルムを両国で同時に放映することを提案した。取材班は、エンジニア 4 人、ジャーナリスト数人、外交官 1 人で構成されていた。彼らのうち二人の名前を私は記憶に留めている。玉井さんとミアギさん（訳注：おそらくアルジェリア研究者の宮治一雄氏）である。私が 1991 年に日本を訪れた時、彼らは私に会いに来てくれた。取材班は、アルジェリア国営放送が貸し出した車 2 台を使って移動した。出来上がった 45 分のルポルタージュは、アウレフの街並み、当地の日常生活、民俗、ナツメヤシ農園、フォガラなどの映像を納めていた。特にフォガラに関しては詳細で、昔ながらの分水器シェグファを使った水の計測と、複雑な水の単位ハバを用いた計算方法、それにフォガラ内部の浚渫の様子も紹介していた。この他では、デザートを砕く様子や、クスクスや他の色々な料理もフィルムに写されていた。なお、「一番驚いたこと」として紹介されていたのは、住民総出での道路の砂除け作業であった。タムタムの陽気なリズムにのって、皆がリズムカルに鋤を振り下ろす様子が、取材に来た人々には新鮮に映ったらしい。民俗の方では、男たちがラムハダラ (Lamhadara) という棒を振り上げて踊る伝統舞踊も収録されている。この舞踊はダラニ (Darani) と呼ばれ、モロッコに起源を發し、元奴隷の間で伝えられて来たらしい。小堀教授が教えてくれたところによると、この伝統舞踊の写真は、後になって、東京大学の正門のところに展示されたそうだ。

### 県会議員に選出される

学校の方に話を戻すと、私はまた仕事が増えた。アウレフ郡の学校給食の責任者に任命されたのである。郡には 8 つの学校があるが、そのうちの幾つかは、町の中央から 45 キロも離れていた。責任者の責務として、週に一回各学校を、材料の補給と視察のため訪れなければならなかったもので、これは心身ともにこ

たえた。しかし、どの学校の教師たちも、親切に熱心に私の仕事を助けてくれた。各学校では、教師たちが持ち回りで、週に 2 時間ずつ給食のための仕事を担当した。一方、学校の外でも私は多忙になった。地元の赤新月社協会の委員長に選出され、また、観光協会の書記にもなったのである。しかし、いずれの組織でも活動が軌道に乗ると、私は若者の中から自分の補佐役を任命して、私が手いっぱいな時は仕事を任せるようにした。

1968-69 年度が終わり、夏休みに入った時のことであるが、地元の FLN 地方支部では、県議会選挙の候補者の選定が行われた。当時私は FLN 青年部の党员だった。白羽の矢は、その時アウレフを留守にしていた私に当たった。ちょうど、しばらく夏の休暇を過ごすためアルジェリア北部へ行っていたのである。しかし、どうも地方支部の人々は私のことを、まだ若く潔癖で、エゴイズムとは無縁だと思って候補者に推したらしい。候補者選出に関しては、アウレフの町で住民集会も開かれたが、この席で私の父は私を候補に立てることに反対を表明し、立候補の登録を取り消すよう主張した。これに対して、この住民集会の司会をしていた FLN 地方支部の責任者ゼルギニ (Zerguini) 大佐は、私の父の抗議を跳ねつけ、次のように人々の前で演説した。

「我々の革命憲章の下では、父も息子もない。アルジェリアは前進しなければならない。我々は全員が、母なるアルジェリア国家の息子である。アルジェリア万歳！」

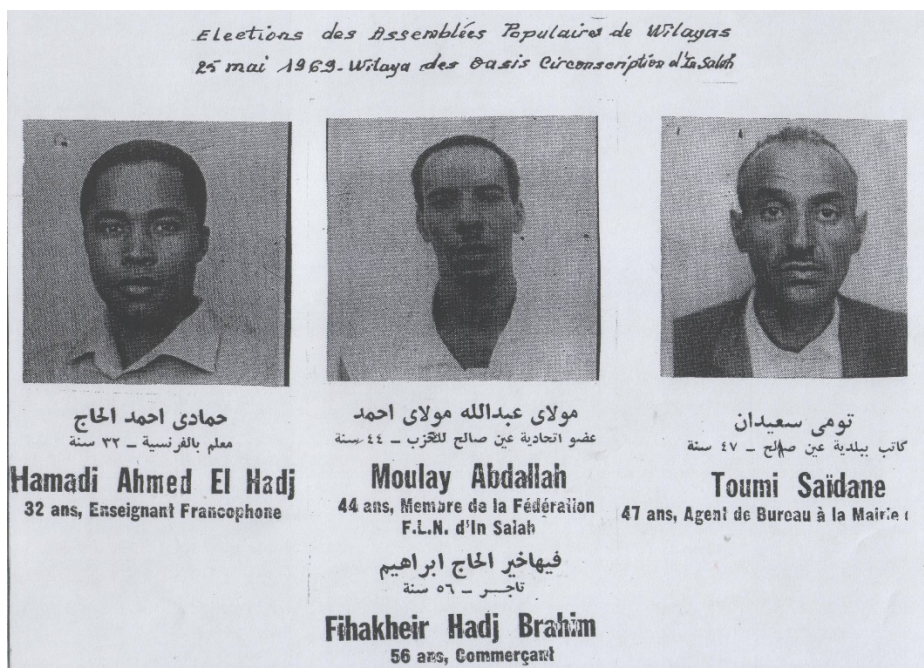
聴衆は拍手喝さいし、口々に「アルジェリア万歳！」を繰り返した。大佐は演説を続けた。

「もし我が党 FLN が、国家の重要な仕事を、ある人物に託そうと決めたなら、その人物に嫌という権利はない。それでも、その者が背を向けるなら、その者は社会の錆びた歯車であり、役立たずの烙印をおされるだろう。」

演説はまたもや拍手喝さいを受け、これには私の父も折れざるをえなかった。大佐は更に聴衆を煽った。

「我々は皆、国家のために戦う闘士である！」

この闘士という表現に、大佐の演説を聞こうと集まって来ていた聴衆は興奮し、会場は熱狂の渦と化した。

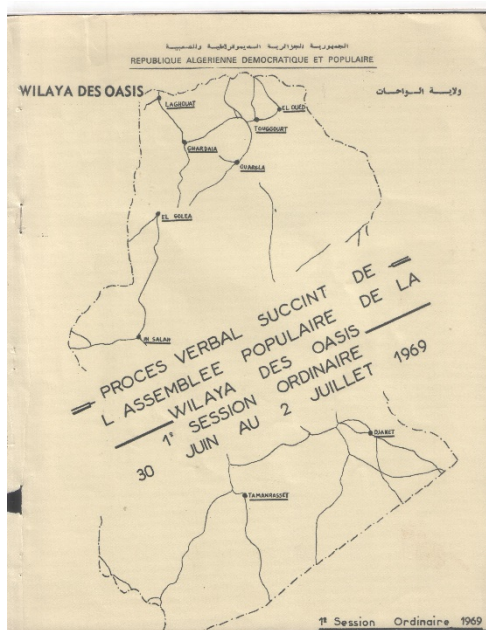


1969 年県議会選挙の候補者リスト。左端がハジ氏 (著者提供)

投票も私の留守中に済んでしまった (訳注：添付資料によると 1969 年 5 月 25 日)。当の私はといえば、新聞で自分が当選したのを知った。北部での休暇を切り上げてアウレフに戻ると、私は郡役所で一通の電報を受け取った。内容は直ちにインサラーへ、次にウアルグラへ行き、当時アウレフ郡が属していたオアシス県の人民議会の初会合に出席せよというものだった。

FLN ウアルグラ地方の責任者のゼルギニ大佐や、FLN オアシス県支部の委員長や執行委員全員が臨席する中、県知事の司会で県議会の第一回通常議会が開催された (訳注：添付の議会資料からすると会期は 1969 年 6 月 30 日～7 月 2 日)。議会の執行委員会のメンバーが選出された。なお、議員たちの任期は 1969 年から 1974 年までだった。(訳注：議員数 37 名)

脚注：FLN (民族解放戦線) は、アルジェリア独立闘争の母体であり、独立後から 1989 年 2 月の憲法改正までアルジェリア唯一の合法政党。かつての共産党一党独裁の国々と同様に、党・政府・議会が混然一体の権力構造であった。その様子は、上記最下段のハジ氏の議会の様子の描写からも覗える。なお、県知事はフランス式に大統領による任命制で、人選に民意は反映されない。



オアシス県（当時の名称）県議会の 1969 年通常会合の議事録（著者提供）

## 人種差別と議員の責務

これは、私が県議会議員に選ばれた後の話で、1970 年代初頭の頃のことである。私は議員としての経験は浅かったが、崇高な使命感に燃えており、きっと世界を変えることが出来ると信じていた。特に、この頃進行中だった農業革命については、その成功を信じて疑わなかった（訳注：1971 年 11 月施行の「農業革命」法）。反対にアウレフの大地主たちは、この社会主義的な農業政策を脅威と感じており、小作農へ貸しているフォガラの水を取り上げようとした。アウレフの郡役所は介入するそぶりも見せなかったため、私は看過できず、県議会議員の資格において、インサラールにいる市長に対処を求める手紙を送った。以下は、その 1972 年 5 月 18 日付の手紙の概要である。

『一部の地主が小規模農家の農業用水を奪おうとしています。もしそうなったら、彼ら小規模農家はどうすればいいでしょう。彼らは何年間も真面目に水の使用料を地主に払ってきたのに、その彼らの農園から今水が取り上げられようとしています。

覚醒した人民議会の目は今どこへ向けられるべきでしょうか。どうか貴殿から地元当局に指示して、このような行為を直ちに止めさせ、また既に実行されてしまった分については白紙に戻させるよう、介入させてもらえないでしょうか。』

この書簡を受け取ったインサラールの市長は、アウレフまでやって来た。そして、郡議会議長、カスマ（Kasma）FLN 支部長、それに私を招集し、農業革命

の道筋に反したり、この政策の施行を邪魔したりする全ての行為を禁止とするとの命令を下した。アウレフの郡長は、インサラの市長が私の求めに応じてやってきたことに勘づき、私に対して腹を立てた。この騒動は、アルジェリア南部の住民へアルジェリア国籍を付与するかどうかという、その頃世間を騒がせていたもう一つの問題とも絡んで複雑だった。反対派の中に、政府広報に「少なくとも二代に渡ってアルジェリア領土に住んでいるものでなければ、アルジェリア国籍を取得する資格がなく、農業革命の適用は受けられない」と書いてあったと言いだす者がいた。この男は、役所の戸籍係に、この法律の文面を見せ、「この規定によれば、ナツメヤシ農園で働く黒人たちはアルジェリア国籍をもらう資格がない」と主張した。戸籍係の役人は、この主張は法に合っていると判断し、奴隷の子孫にあたる住民からの国籍申請を却下した。その数は数千人に上った。私はウアルグラへ行き、県議会の議長である県知事に、アウレフでの人種差別の事実を伝えた。知事は直ちに決断し、我々黒人たちにもアルジェリア国籍を付与せよとの命令を出した。この騒動の後も、かつての主人たちとハラティンたちの間の軋轢は、決して消えることはなかった。そして、33 年後も後になって再び燃え上がったのである。

33 年後の騒動の引き金を引いたのは、アウレフにやって来た一人のジャーナリストだった。この人物は物事を細部に渡って観察し、このアルジェリアの南の果ての地では、アラブ人と黒人との差別が未だ生きて見抜いた。町のモスクは、アラブ人が行くそれと、黒人が行くそれとに分かれているということが、如実にその現実を物語っているというのだ。このジャーナリストの書いた記事は、新聞のエル・ハバール紙 (El-Khabar) (訳注：アラビア語。有力紙ではない。) に載った。その中では「アウレフでは、アラブ人はアラブ人用のモスクを、黒人は黒人用のモスクを持っている」と書いてあった。また、シェイク・ベイに彼の自宅でインタビューした際、シェイクと、その息子のアブデルカデル (Abdelkader) が語ったという内容も載っていた。曰く、「この地の黒人はファラーシャ (falasha) の子孫で、アラブ人から財産を奪って行った連中である」と。(訳注：ファラーシャは、エチオピア系ユダヤ人のこと。ここでは、サハラ以南から連れてこられた異民族くらいの意であろうか。) この不用意な発言は、地元の二つの人種の間で眠っていた憎悪の感情に再び火を付けた。ここティディケルトで点火された火は、瞬く間に周辺地域のトゥアット、ティミ、ティサビ (Tsabit)、グララ、ハガールにまで燃え広がった。アルジェリアの他の多くの新聞でも、この記事の内容を巡って論争が繰り広げられた。中には、こうした記事を書き載せること自体が軽率であると批判するものもあった。住民たちの眠っていた感情に火を付け、徒に騒動を煽る行為であると言うのだ。

シェイク・ベイと息子は、例のジャーナリストは、自分たちの言ったことを

歪曲して記事にかいたと弁解した。一方、当のジャーナリストは、エル・ハバール紙で、自分の書いたことは真実であるとの主張を繰り返した。彼はインタビューを録音テープにとっていたはずである。私の感触では、このジャーナリストは正確にレポートしており、事実はそれ以上でもそれ以下でもなかったと思う。彼は、私の所にも来て、当地に残る人種差別についてどう思うかと質問したが、その時の私の答えは、何も手を加えずに正直に記事にしているからである。私は、この時、おおよそ次のように答えた。

「フランス人は長くこの地にいましたが、奴隷制を禁止しはしたものの、住民の間の人種差別の因習には見て見ぬふりをしました。人種間の反目があった方が、支配する側には都合よいからです。今我々奴隷の子孫は、学校の教育の普及に大きな期待を寄せています。教育だけが、人々の頭から差別の考えを取り払う最も有効な手段だと思うのです。」

### 偽手紙事件

私は、友人や同僚たちが私を褒めてくれる時、喜んでその言葉をそのまま受け取っていたが、自分の身に降りかかったある事件を通して、そうした人々の笑顔の中には時として実は毒が隠されているということを知った。

1970 年代の初め、私は引き続きベンバディス男子校の校長の職にあったが、いつも志を高く持ち、自分なら世界を変えられるくらいの意気込みで職務に励んでいた。勢い他の教師たちに対しても厳格になりがちだった。私は、他の教師たちが、どのように授業をしているかを厳しく、かつ頻繁にチェックし、もし怠惰や不手際が認められた場合は、時には厳しい処罰を下した。従って、一部の怠け者で、教育者という崇高な使命に自覚のない教師たちからは反発を買った。彼らの中には、逆恨みして私を誹謗中傷する者もあった。以下に語るのは、そうした中でも最も狡猾だったある人物が、私に仕掛けた報復劇である。後から知ったことであるが、この男は知恵と能力の全てを駆使し、18 か月間もの時間をかけて、私に対する悪意の仕返しの準備をしたらしい。

犯人は、入念に私の筆跡のコピーを練習し、私の友人たちのところに偽手紙を送って、私の評判を貶めようと画策した。犯人には、この分野の天賦の才能があったらしく、偽手紙は、よほど注意して見なければ、誰も本物と偽物の違いに気付かない出来だった。犯人は、筆跡の真似に留まらず、書面のレイアウトも、私が普段するのと全く同じにしていた。サインにしても、私は楕円形のサインの真ん中に判別不能な線を入れていたが、この男にとっては何ほどのこともなかったらしい。

世の中には説明不可能な超自然的な能力を持っている人たちがいる。そうした人たちは、見たり聞いたりした事物を寸分たがわず再生出来たり、あるいは、

誰かの体つき・声・しぐさを本人そっくりに真似したりできる。筆跡は一種の芸術であるが、こうした特殊能力を持った人たちにかかるとは、その敵ではない。今は亡き、俳優でアルジェのエル・ハラッシュの区長も務めた、ハッサン・エル・ハサニも、この種の真似の天才だった。名人ハッサンは、男だけでなく、女や子供、知的障害者など、70 種類もの声を、何の苦も無く真似することが出来た。しかも、一度聞いただけで十分だったという。彼がアルジェリア・テレビでやっていた「ミスター・ブバグラ (Monsieur Boubagra)」の役は長年我々を楽しませてくれた。

さて、私の方の犯人は、私を近くで見張って、辛抱強く好機が訪れるのを待っていたらしい。私はよく学校で教師仲間たちに、ブリーダ (Blida) でアルジェリアのために働いている、心優しいフランス人の友人たちのことを話していた。犯人は、彼らから私への手紙が学校の事務室に届いた時、それを盗み読みし、また封筒の裏の差出人のアドレスを記録した。そして、それら友人たちの家の娘宛てに、私からのラブレターを偽造し送りつけた。幸い、手紙を受け取った友人のほとんどは聡明にも、これは誰かの悪戯だと看破し、この偽手紙を添えて、一体何が起こったのかと私に聞いて来た。ただ、偽のラブレターを受け取ったうち、少々口やかましい一家族だけが真に受けて激怒し、私に絶交を申しわたして来た。私は何度も弁明の手紙を書いたが、その家族からは梨のつぶてだった。

事情が判明したのは、それから 14 年も経った後のことだった。エル・ウエッド出身の元同僚教師が、犯人は、やはり当時学校にいた教師の一人で、私の評判を傷つけようとしてやったことだと教えてくれたのだ。犯人が死んだので、やっと私に教える決心をしたと言っていた。謎は解けたが、私は困惑した。絶交した件のフランス人の家族とは、彼らが冬の休暇で沙漠を訪れた時に知り合った。以来、親しく友達付き合いをするようになり、私も招かれて彼らのいるブリーダへ行ったりした。彼らが私に付きっきりで、何日間もかけてカビリー (Kabylie) 山地の名所を案内してくれた時のことは今でも忘れられない。それが一人の心無い人間のせいで、私たちの親交は断絶してしまった。その友人たちが、まだ健在なら、私は彼らに会って誤解を解きたいと思う。あるいは、きっと彼らも、時の経過と共に冷静になり、あれは誰かの悪戯だと気付いたに違いないと、そう願わずにはいられない。あれから私は繰り返し自分に言い聞かせている。世の中には常に他人を騙そうとする奴がいる。そういう奴らは、一時なら全員を騙すことも出来る。しかし、全員を永久に騙し続けることは不可能だ。詩人エル・ムタンナビが言うがごとくである。「人間には永久に隠し通す力はない。“未来”がいつか真実を明らかにする。」